

楽譜から表現に必要な情報を 読み取る力を育てる授業

学籍番号 (199301)

氏名 (池子和希)

主指導教員 (田中龍三)

1. 研究の概要

1.1 研究の目的

本教育実践研究の目的は、音楽科の授業において楽譜から表現に必要な情報を読み取る力を育てる指導の方法について学校実習での実践を通して導き出すことである。

音楽科の授業において、楽譜から表現に必要な情報を読み取るとは、ソルフェージュ的なことにとどまらず、楽譜を読んで楽譜に書かれている記号や音高などの情報と歌詞やその曲の背景、イメージなどがかかわらせて、さらに表現を豊かにすることだと考えている。

1.2 研究の背景

筆者は、学部生で教育実習に行った際に、音楽の授業を見て、授業の中で楽譜をあまり活用していないと感じた。具体的な場面は、歌唱の授業において教科書の楽譜を見ずに、CDを聴いてそれを真似したり、歌を覚えて楽譜を見ずに演奏していたことである。この様子を見たときに、楽譜に書かれている音楽を表現するために必要なことが、一切活用されていないと感じた。この経験をふまえて、楽譜を音楽の表現に活用することができる授業はどういうものか、研究したいと考えた。

1.3 研究の方法

研究は以下のような方法で進める。

- ① 本論の目的にある「楽譜から表現に必要な情報を読み取ること」について文献を参考にし、本研究における、その意味を規定する。
- ② 実習校における授業の中で楽譜をどのように活用されているか、また生徒の様子などを観察する。
- ③ 実習校でアンケート調査を実施し、実習校の生徒が楽譜をどのように活用しているか、どのようにとらえているか、などについて調査し、状況を把握する。
- ④ そのアンケートの結果と「楽譜から表現に必要な情報を読み取ること」の意味をふまえ、楽譜を音楽の表現に活用した授業を構想し、実践する。
- ⑤ 授業を振り返り検討を重ね、新たな授業をおこない、生徒が楽譜を以前よりも活用できているかを検証し、授業にどのような工夫が必要かなどを探っていく。

2. 研究の結論と今後の課題

2.1 研究の結論

この研究を通して、楽譜を音楽の表現に活用するには、まず楽譜に関する基礎的な知識、いわゆるソルフェージュ的な基礎知識が必要であること、またそれを理解させるにはかなりの時間を要することが分かった。それでも、やはり楽譜は音楽を表現するうえで欠かせないものだと考える。なぜなら、強弱やリズムなどだけでなく、楽譜には耳で音源を聴くだけでは拾いきれないような、作曲者の意図や思いが込められているからである。これらの内容を生徒が楽譜から読み取り、表現を工夫できるような学習活動を設定する必要があると考えた。

実際に、楽譜に焦点を当てた授業を実践してみて、生徒は頭を悩ませながらも、自分が読み取った情報と音楽から得たイメージを関わらせて、考えることができていたと思う。

しかし、楽譜に書かれていることからイメージや雰囲気を感じ取らせて終わるのではなく、そこで得たことを音楽の表現に活用することを授業の中でおこなうことを忘れてはならない。音楽の授業において、楽譜に書かれていることをただ自分なりに理解してイメージを膨らませて終わるのではなく、それを音と関わらせ、音に返して理解を深めることが必要である。この過程を忘れずに、授業を実践していきたい。

また、学校実習開始時の事前アンケート調査との研究授業後の事後アンケート調査の結果をから、楽譜が音楽の表現に必要であると感じている生徒が約20%増加しており、生徒が楽譜の必要性を少しでも感じるようになったのではないかと考えられる。アンケート調査の結果から見えた課題としては、約7割の生徒が楽譜の必要性を感じている一方で、自分が表現するにあたっては楽譜が必要であると答えた生徒が半分にも満たないことが挙げられる。楽譜が必要であると感じさせるだけでなく、それを生徒が音楽を表現する際に、楽譜に書かれていることをもっと見よう、とする意識を持たせることが今後必要になると考える。

また、本研究を通して、授業の発問の際に、生徒の意見に対して、さらに考えを深めることができるような質問や例え、アプローチをしていくことが必要だと考える。ただ生徒の意見を繰り返したり、言い換えて終わるのではなく、そこからさらに踏み込んだ質問を投げかけたり、より具体的な例えをしていくことが、生徒の理解に繋がることを学んだ。

2.2 今後の課題

今後の課題としては、楽譜から情報を読み取り、それを表現に活用する授業を実践するためには、楽譜に関する基礎的な知識を理解させる指導、楽譜に書かれている記号やリズム、歌詞などの情報をしっかりと理解した上で、それが音楽とどのように関わっていくのか、そのことが書かれていることによってどのようなイメージ、雰囲気を持つのか、ということを考えさせる指導の改善が挙げられる。そのためには筆者自身が、生徒にイメージや雰囲気を持たせるために、さまざまな情報を理解することや、イメージや雰囲気を持てるような学習活動を設定できなければならないと考える。また、楽譜を授業の中で取り扱うには、その必然性や意図を筆者自身が考えそれを生徒に理解させること、そしてその方法を考えることが重要である。加えて、授業をするうえで、生徒が興味、関心を持てるような学習活動、教材の工夫、発問の工夫などに取り組んでいきたい。